
【二百文字小説】小さな玉手箱

つるめぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【二百文字小説】小さな玉手箱

【コード】

N3634W

【作者名】

つるめぐみ

【あらすじ】

ジャスト二百文字の作品集です。お題小説はタイトル名がお題となっています。

不味い酒

俺は店内に響く怒声と嗚咽を背後に、ウイスキーを飲んでいて。別れ話だろうか。見ると女が殴られた頬を押さえて泣いていた。不意に男の拳が「黙れ」という言葉とともに上がった。

「思わず俺は立ち上がると、男を殴り倒した。」

人を殴ったのは初めてだ。金を置いた俺は逃げるように酒場から出た。

なぜ、男を許せなかったのか。あまりにも女が似ていた。

病死した妻に

拳に響く微かな痛み。

後悔した。あの酒場には二度と行けないなと。

愛されて

ある日、幼稚園児の娘が私に言った。

「どうして私にはパパがいないの？」

答えに困って嘘をついた。パパは知らない女の人と出ていったんだよ、とは言えなかった。

忘れた頃、小学一年生になった娘が私に言った。

「私、お父さんに愛されていたんだね」

「なぜ？」と聞く間もなく渡された漢字ドリル。

ページには覚えてたの娘の名前が書いてあった。私と夫の名前を一文字ずつ取った漢字が。

理由を言えないまま、ただ娘を強く抱きしめた。

羽ばたき

今年もツバメが我が家の軒下に巣をつくった。

餌をねだるヒナが可愛らしい。

しばらく観察していると、親鳥の足に識別札のようなものが見えた。

よく見ようと目を凝らしていると、私の隣に来た姉が笑った。

「巣から落ちていたあの子、無事に親鳥になって戻ってきたんだね」
聞くと去年、ヒナが落ちているのを見て巣に戻したという。

この先、生きていけるのか不安で目印を付けたというのだ。
力強く羽ばたく親鳥に命の大切さを教わった。

クリーミー選手権のある祭りは、まだ終わらない。(前書き)

沢木香穂里先生のお題

『クリーミー選手権』と『祭りは、まだ終わらない』
で書いてみました。

クリーミー選手権のある祭りは、まだ終わらない。

「グラスを冷やすといいんだよ」

「いいや、素焼きに入れるといいんだ」

「なんだ、スモーキーバブルスを知らないのか」

桜舞い散る中、我の考えこそ一番と男たちが競い合う。

ビールの泡立ち知識自慢をする上司たち。

未成年の新入社員はジューズを片手に呆れた表情だ。

「お前たち。そろそろやめないと乾杯できないぞ」

乾杯の音頭とともに一気飲みした上司たちは、啞然とする新入社員を見た。

「次は夏祭り会場の場所取りをよろしくな」

やさぐれ看護師（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

やさぐれ看護師

私の人生計画は、お金持ちの患者さんやカッコいい研修医をつかまえて結婚することだったのよ。

それが婦長ときたら、嫉妬して邪魔ばかり。

だから駅前の居酒屋で思いっきり飲んでから、終電に乗ろうとしたの。

あれが間違いだったのね。

今では半透明の患者さんが話しかけてくるだけで、他の人は見向きもしてくれないわ。

得したのは食事をしなくていいってことくらいかしら。

もうどうでもいいから決めた！ 婦長を呪い殺してやるってね。

歩き方が間違っていた。(前書き)

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

歩き方が間違っていた。

裕福な家庭に生まれ、欲しい物も好きなだけ手に入れ、勉学もスポーツも一度も負けたことがなかった。一流大学には首席合格し、卒業まで誰にもその座を譲らなかった。

スポーツ界にも注目され、メジャーデビューも可能だった。

しかし私はその道を捨てた。やりたいことがあったからだ。

それが今では檻の中。粗末な食事を渡されて、自由な生活すら許されない。

どこで失敗したのだろうか。

世界が震撼する完全知能犯罪だったはずなのに。

鍋がうまい！（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

鍋がうまい！

凍えるような季節に帰宅して、食卓にある鍋は我が家の恒例だ。遅い時間でも待つてくれている妻の優しさがあり難い。

今日の鍋はすごく贅沢だな。野菜だけではなく鱈や白子まであるのか。

とにかく出汁がうまい。まるで高級料亭の味だ。

「お仕事お疲れさま」と言ってくれる妻の言葉で涙が出そうになる。

一人息子も素直で私の誇りだ。

「お父さんお帰り。蟹と牡蠣の鍋、美味しかったよ」

慌てて席を立った妻が何故か息子の口を押さえた。

早いのがとりえ（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

早いのがとりえ

俺はスピードランナーだ。ライバルは二人いるが負けたことがない。

ただ太っているだけのあいつが主張しているのは腹が立つ。

背が高いだけのあいつも分刻みで走っていると豪語している。

誰ひとり俺をとめることは出来ない。抗うことも不可能だろう。

体力がなくなったら終わりだって？

野暮なこと言うなよ。なら少しでも遊んでみな。

そうすると俺の早さが身に沁みてわかるはずだ。

さて、何時だ。俺たちが差している数字を教えてください。

再検査ドキッ（前書き）

沢木香穂里先生のお題で書いてみました。

再検査ドキッ

母が他界した。

世話好きの母は、いつも独り者の私を気にかけていた。

その数日後、私は再検査を受けることになった。

なんでも非常事態らしい。重い病気なのだろうか。

母の後を追いかけるようなことになるのではないか。

医者に指示されて、緊張しながらレントゲン撮影をする。

こんな時に母がいてくれたら。

診察室に入ると、レントゲン写真を見せられた。

「何度撮っても白い影がはっきりと写るんです。この顔に見覚えはないですか？」

ピクルスの夢

自由の国アメリカではメジャー級になった。食品業界のリースともいえるあいつとは最高のバッテリーだ。

ピクルスと聞けば、誰もが思い出して生唾を出す。もう付け合わせとは言わせない！

ところが日本ではどうだ。ピクルス抜き？ 戦力外通告って酷いだろう。

代わりに漬け物とかいう奴が、食卓では神様の代打を務めている。そのオーナー、俺を引き取ってくれないか。

漬け物との交換トレードが俺の夢なんだ。だからカゴに入れてくれ。

フライングスペシャル

創作期間一年、長距離飛行に挑戦する時、それが今だ。

高台から水上を飛んで距離を競う鳥人間コンテスト。

エンジンのない機体で飛ぶという大会の出場者として僕はいる。

搭乗者の僕は機体に乗り込むと、動力源となるペダルを踏み込んだ。

遠ざかる仲間の声と観客の歓声。

僕たちがつくった機体は最高傑作だ。一気に距離をのばしていく。

ところが優勝間違いなしと感じた時、放送が聞こえた。

「ただ今の飛行、フライング失格となります」

金縛りに遭いたい。

私は秘書だ。信頼している先生は人徳があり、いつも応援者がついて歩く。

「先生、お願いします」

「これはほんの気持ちです」

絶対に金に困らないから私についてくるといい。先生の言葉は今でも忘れない。

ところが新聞記事に出たのは、全ては秘書がやったことという文字。

また一生を保証すると言われた私は、彼の責任をとって法廷に立つ。

両手首に掛けられた手錠が冷たい。

私が縛られたかったのは、この金じゃなかったはずなのに……

誰も見ていないだろう……。

帰りの会で副級長の女子が泣き始めた。彼女の笛が犠牲になったのだ。

唯一の目撃者は生徒会長の僕だ。絶対に奴を懲らしめなければならぬ。

成績優秀、運動神経抜群の僕と奴の主張を比べたら、どちらが正しいのか分かるだろう。

結果、正義は勝つ。僕は満足した。彼女の唇は守られた。

今日も僕は教室に残って彼女の笛を見る。

教室には僕一人。いつも通り、彼女の机から笛を出すと紙が入っていた。

「私が許しているのは、あなただけ」

二度寝の幸せ

現実か非現実の世界か判別しにくい浮遊感が心地よい。

あと五分。誰も起こさないでほしい。

今週は仕事も頑張った。趣味も出来ず睡眠もまともにとれなかったのだ。

今日こそは二度寝すると決めた。不足した睡眠時間を纏めてとつてやる。

そう決めたのに、全身が光る羽根つきの小人が現れた。

「まだ寝足りないのですか。早く逝かないと遅れますよ」

そうか。もう睡眠は必要ないんだっけ。

二度寝は奇麗な姉ちゃんがいる天国でしょうっと。

ファイナリストの冬

今年も優秀な選手たちが決勝まで勝ち上がってきた。

飼い慣らしから始まり、大袋運びや忍び込みで勝利した精鋭ばかりだ。

引退間近の者や若い者もいる。それでも皆がプライドを懸けてやってくる。

決勝用の赤い衣装に身を包み、スタート地点にソリを出す。

小雪が降る中、司会者がマイクを手にして叫んだ。

「決勝は恒例のプレゼント配りです。誰が一番、世界中の子供たちに配ることが出来るのか。ではサンタクロースさん。頑張ってください！」

どこから手をつけよう

困った。妻に頼まれはしたものの初めての経験だ。どうしたらいいんだ。

お願いだから暴れないでくれよ。湯の温度は大丈夫かな。

こんなことなら勉強しておくんだった。親父はどうしていたのだろう。想像すると笑ってしまいそうだ。

慎重に。けれどどこから手を付けていいのかわからない。

いつまでも子供を洗えない私に見かねたのか、妻が浴場の扉を開けて言った。

「もう、困ったお父さんね。風邪ひいちゃうから私と代わって見ていて」

プリンの誘惑

学校に行く途中に落ちていた雑誌。表紙を見て僕は思わず足をとめた。

「すげえ、何この巨乳。ぐらびああいどるってなに？ えーぶい女優ってなんだ？」

とにかく、えっちな本に違いない。けれど周りには女子がいるし、僕は班長だ。絶対に見るわけにはいかないぞ。

見ないふりをして歩きだすと、後ろにいた友達が声を上げた。

「すげえ、エロ本だ。中開いて見てみようぜ！」

何も考えないあいつが羨ましい。そのプリン、僕も一緒に見たいのに！

ゆらゆら

憧れていた力を私は手に入れた。権威ある人に弟子入りして、修行した甲斐があったわ。

畜産動物で成功したんだから、きっと彼も大丈夫。

問題は彼に不審がられないかね。失敗するわけにはいかないわ。用意するのは五円玉と紐。これを括り付けたら準備万端よ。

振り子の要領でゆらゆら揺らすと、催眠にかかっちゃうんだから。彼の心を射止めるためなら、私はいつでも真剣よ。

五円玉で叶う恋があってもいいよね。暗示だと言わないで！

赤いコートの女

心地よい風が吹き抜けていく道を、赤いコートを着た女が歩いていく。

持っているのはバスケット。中にはケーキとワインが入っていた。母親に頼まれて、森の中の一軒家に向かっていたので。着くと家の戸を叩く。

すぐに「入っておいで」と返事があった。

女が扉を開けると、待つていたお婆さんは驚いた。

「赤ずきん、どうしたんだい。その服は」

「そろそろお洒落しようと思って」

大人になった赤ずきんは猟師の息子を好きになっていた。

蛸飯な午後

お料理が趣味の私は、まず素材から厳選しているの。

一般家庭の主婦だから、安くて質のいいものを探すのに一番苦労してる。

次に拘るのは下ごしらえ。今日は蛸飯と決めたら昆布を入れて炊かないとね。

蛸は熱を通しすぎると硬くなるから、私は炊けたご飯に混ぜるの。

最後の一工夫には生姜、私は酢漬けのものを横に添える。

帰ってきたわ。仕事帰りの夫は迎えないと。

けれど何故、驚いているの。

ウエットスーツとモリってそんなに変？

来年の手帳

少し早めに買った来年の手帳。

毎年、予定が書いてあるのに白紙に近い状態だ。

一緒に遊びに行く友達がいないとか、そんな寂しさはなくて。

もう一冊の違う手帳が、その時のために用意してある。

「また、手帳出しているのか」

「見ると幸せな気持ちになれるから。メモ欄に名前書いていいかな」

あなたと会えるのを楽しみにしているんだよ。

育児休暇を取ったら、頑張っても言われたわ。

元気な経過を母子手帳にも記していけるといいね。

彼と私の一週間（前書き）

お題『 と私の一週間』

に好きなものを入れるお題となっています。

彼と私の一週間

月曜日はライスを大盛り。

火曜日はコシが強いうどんを。

水曜日はキャベツも刻んでコロツケ。

木曜日は寒かったから鍋。

金曜日は頑張れるようにカツを揚げて。

土曜日はお刺身。

それを見た彼が言ったの。

「いつも同じものを出すなよ。飽きたぞ」って。

さすがにお刺身は失敗だったと私も反省しているわ。

だって作りすぎてしまったんだもの、カレー！。

一週間飽きない私が変わるのかな。

最終の日曜日は冷凍庫行き。

彼はカレーが嫌いみたい。

晩秋ど真ん中

燈火親しむべし。韓愈の誌が読書の秋の由来だそうぞ。
做って本の虫になったけど、こもっているせいか体重が増えたみたい。

意気込んで今度は運動の秋に変更。

彼と楽しいクリスマスを迎えるためにも努力しないとね。

高いお食事を前に、夜景を見ながらワインを一口。

歩きながら考えて、お腹が減ってきたわ。

運動後の間食って最高。食欲の秋もわかる気がする。

冬眠前に栄養を蓄えるのと同じね。

ところで私、何で運動していたんだっけ。

放課後のコーンポタージュ

私は野球部のマネージャー。

冬の部活動の前には、必ずコーンポタージュスープを買う。

プルタブを開けて一口飲む。この瞬間が幸せ。

けれど今日は振るのを忘れたせいで、粒が残って食べられない。指で出そうとしても取れないし、どうしようかな。

舌を出したら食べられるかもと思って、悪戦苦闘する。

「マネージャー。そろそろ練習……」

振り返るとキャプテンと目が合って、赤面して行っちゃった。

練習に影響しないか、すごく心配だ。

ただいまのお時間

東の空が少し明るくなってきた。

小鳥も目覚めの時間なのか、鳴き始めている。

穏やかな朝だ。ひどかった二日酔いも消えたようだ。

今なら冷静に言えるはず。勇気をもって立ち向かおう。

自分に言い聞かせると、深呼吸してから扉を開ける。

「ただいま」

すぐに妻が玄関先に出てきた。

「今、何時だと思っているの。朝帰りの理由を言いなさい」

奥では、朝のニュースが時刻を告げている。

「ごめんなさい」

言い訳できずに謝るしかなかった。

青春ロックは目にも鮮やか(前書き)

お題『おやじのロックンロール』と『目にも鮮やか』の合体作です。

青春ロックは目にも鮮やか

二十年ぶりの同窓会で、高校時代の特技を披露することになった。むかしはエレキギター片手に、仲間とパフォーマンスをしたものだ。

文化祭では女子を虜にしたっけ。俺が一番人気と張り合ったこともあったな。

演奏の準備をして構えると、いい歳になった女子たちが視界に入る。

初恋の子や副会長って、どこにいるんだ？

目にも鮮やかな衣装と化粧。化け物屋敷に来てしまったか。青春時代の張り合いは、どうやら女子が引き継いだらしい。

冬虫夏草（前書き）

ホラー、文学以外のジャンルで挑戦しました。

冬虫夏草

異星人は闇の中に浮かぶ青い星を見て声を上げた。

「あれが地球か。人間という生物に、我が同種が切り殺されている星」

隊長の呟きを聞きながら、部下が合図を待つ。

「人間に復讐を。大気圏に突入。上空に停止後、我が同土を撒け」
宇宙船から小さな粒が投下される。

巨大都市上空で任務を遂げ、誇らしげに隊長は語った。

「人間という虫けらめ。我が植物星人の餌となれ。夏には虫けらから芽が出て、冬にはない絶景を観察できるはずだ」

ソーラーカーに乗る前に、ドリンク一本！（前書き）

お題『ソーラーカーに乗って』と『ドリンク一本！』の合体作です。

ソーラーカーに乗る前に、ドリンク一本！

仕事前に仲間にドリンクを一本渡す。

文句を言わない奴なので、クレームが趣味の客相手にはすごく助かる。

「B地区の三番ブロックで例の客がお待ちだ」

そら来た。俺は仲間の肩を叩いた。

「わかりました。行ってきます」

人類が金星に移住してから二百年経つ。

太陽が近いここはソーラーカーが主力の足だ。

液体燃料を口に入れた最新ロボットの仲間は、ソーラーカーに乗り込んだ。

俺も行くか。人情に厚い人間の相手は人間に限るからな。

悪いやつ

彼はある衝動に駆られていた。あのものを壊したいという抑え切れない気持ちだ。

標的に飛びついた瞬間、彼の中で何かが弾けた。

思う存分いたぶろう。目を剝り抜き、はらわたを取り出してやる
うと。

悪意が彼の脳内を占領する。狂人の祭りは続く。

「狂人って誰だ。それと残酷描写って思わせていいのか」

犬は壊す。飼い主が大切に使っていたクマのぬいぐるみを。

本当に悪いやつは誰なのか。彼のセリフに謎が隠されているのか
もしれない。

悪いやつ（後書き）

【番外編】

『地の文に突っ込みを入れる』を含めてみました。

期間限定

期間限定のビールを買ってきた。

今日はこれで妻と憩いの一時を過ごそう。

お互い忙しくて話が出来なかったからな。

妻が何か悩んでいそうなのも気になる。

ところが妻は、注いだビールを見て眉を曇らせた。

「ごめんなさい。飲むのはやめたの」

あんなに好きだったのに、やめたって？

「妊娠したのよ」

初産だから、なかなか言えなかったのか。

今度は違うシーズンの酒で祝杯を挙げような。

期間限定の離乳食ってあるのかな。調べてみよう。

風邪をこじらせてしまった

かき入れ時に風邪をひいてしまった。

熱が下がらず、苦痛で唸るしかない。

寝込んでいると呼び鈴が鳴った。開けると女上司だ。

「風邪には栄養よ。台所借りるわね」

仕事場と同じ調子だ。勝手におかゆを作って出て行ってしまった。

取り敢えず一口食べると、美味しくて手が止まらなくなった。

仕事も料理も出来るのか。反則だろう。

出勤した時、まともに顔を合わせられるのか心配だ。

体が熱いな。風邪をこじらせてしまったかもしれない。

雨の路地裏・ストーリー

塾帰りに突然の雨に遭った。

いつもは汚いと思って避けている路地裏を近道に使う。

不意に扉が開いて男の子が出てきた。

「お前、帰りなの？」

「割烹着姿の級友だ。」

家が食堂だとは知っていたけど、逢ったのは凄い偶然。

手伝いの最中みたい。

「傘貸すから、待ってて」

油がはねる音が奥から聞こえる。

勉強に手伝いか。彼も頑張っているんだ。

明日は傘を返す口実で寄らせてもらおう。

彼のお店のトンカツは、きっと御利益がありそうだから。

ネオン街の研修旅行風景（前書き）

お題『くつろぎのネオン街』と『研修旅行』の合体作です。

ネオン街の研修旅行風景

街で誘った女性二人と高い酒を飲む。

ホスト研修旅行中の俺のノルマは、この獲物を落とすことだ。ミンクのコートと大粒の宝石。お嬢さまに間違いないだろう。ここらはネオン街でもある。懐はかなり温かいはずだ。

「今日は楽しい話をありがとう。お代は払うわ」
これで研修終了、馬鹿な女は騙しやすい。

ほろ酔い状態で先輩のところに戻ろうとすると、財布がないのに気づいた。

すられたのか。どうやら獲物にされたのは俺だったらしい。

晴れのち目玉焼き

受験勉強中に母が入ってきた。

「見て、お月さまが綺麗よ」

「そんな暇ないよ。夜食つくって」

今日は十五夜だそうだ。

けれど有名大学に入るんだ。気晴らしをしたら集中が途切れる。

他の奴だって努力している。成績が負けている僕は、更に頑張らないと駄目だ。

頬を膨らませて出ていった母が、夜食を持ってきた。

盆の上に皿が一つ。何かと思ったら目玉焼きだ。

マヨネーズで文字が書いてあった。

『がんばって！　これが今日のお月さまよ』

携帯電話

私が持っている携帯電話の数は三。思い出があつて捨てられない。付き合つてきた男性は三。同じ数を残している理由は愛のかたちだから。

四人目の彼とはうまくいくはず。そうでないといけない。

彼が忘れた携帯電話のメールを確認すると、女の名前がいくつかあつた。

『その女、怖いよ。別れたほうがいいって』

メールが私を変えた。うまくいくと思つたのに。

彼との愛のかたちは捨てられない思い出だから。いらぬほうは捨ててこよう。

明日出来る事は明日にやろう。

昨日もカレンダーの前で考えていた気がする。
挫折し続けて何日目だろうか。

内臓脂肪が危険域と診断されてから、ダイエットを決めた。
けれど、我慢すればするほど暴飲暴食をしたくなる。
いつでも痩せられるのだから、ご飯は大盛りだ。

食後にはデザート、風呂あがりにはビール。

ストレスは禁物だ。自分に優しく取り組んでいこう。

本気のダイエット開始は明日にするといい。

今日のことは全て忘れて、目覚ましセットでおやすみなさい。

女子会での涙コーポレーション(前書き)

お題『女子会発』と『涙コーポレーション』の合体作です。

女子会での涙コーポレーション

久しぶりの定時退社ということで、女性社員で集まって飲み屋に入る。

徐々にアルコールも回って気分がよくなってきた。

「私、次長が好きなの」

美形で溫柔な次長は独身だ。

全員が目標に定めているといってもいい。

証拠に皆が我一番と次長との、のろけ話を開始する。

「けれど、次長って所長と付き合っているよね」

思わぬ情報に衝撃が走った。

嫉妬深くて部下いじめをする所長は年増で陰険だ。

女子一同、悔しさで涙を拭くしかなかった。

しましまのレギンス

私から熱烈アタックした彼と、今日は動物園でデート。

彼が買ってくれた白と黒の縞模様のレギンスをはいて待ち合わせ。

人気者のパンダがいて、私と同じ色だ。

マレーバクも発見した。これも同じ色。

次はシマウマ、白黒の縞模様は私とお揃いに見える。

「お母さん。シマウマさんがいるよ」

子供が私を指差す。動物に喩えられるのも変な感じだ。

「こっちは草食じゃなくて、肉食系だけどな」

笑った草食男子の彼の背中を思いつき叩いた。

居残り組のふたり

教室には俺と旧友二人だけだ。今日は鐘がなっても帰る気はなかった。

旧友は容姿も成績も運動神経も遥かに優れている。

それでも負けたくないという想いがある。

「いい加減負けを認めろよ」

勝ち誇る旧友。悔しいが負けを認めるしかない。

「負けた。お願いだから貰える方法を教えてくれ」

これで三年連続惨敗だ。一度くらいは夢を見たかった。

「居残りするから、呆れられるんだよ」

バレンタインデーのコツってそうだったのか、納得だ。

カメレオンみたいな女

忘年会の席で事件が起きた。

社員の人数は間違いない。それなのに料理が一人分足りない。

確認した者と震えるしかない。

「部長、あの人は入れましたか」

示された席に知らない女性がいた。

「あの子、存在感薄いんですよ。どこの部署に行っても溶け込んでしまうし」

獲物を探すように、左右の目が男を追っているぞ。

保護色化した女性が獲物を狩っているとは、幽霊よりも恐ろしいな。

何よりも怖いのは、名簿を見ると私と同じ部署だった。

路線バスが行く

私は小説家だ。ジャンルは文学なのだが、時代は変わったようだ。流行というものがある。歳をとった私の作品は売れなくなっていた。

担当にも古臭いといわれたが、私の路線で書いていきたい。

原稿を手にバスに乗る。

悩んだ。バスに乗り遅れないようにしなくてはいけないのだろう
か

ふと足音に気づくと、サイン帳を持った女性がいた。

「私、先生の作風が大好きなんです」

書いたサインの最後に、大切な読者さまのためにと追加した。

路線バスが行く(後書き)

『バスに乗り遅れる』 ≪miss the busから≫ 時流に後
れて取り残されること。

長い冬の日（前書き）

この話数から、三つのお題を借りた三連作を投稿します。
お題は今回の『長い冬の日』から始まり、

次話は『試験勉強の憂鬱』

最終は『不敵な笑顔』です。

長い冬の日

大学受験を控えた僕に女性家庭教師がついた。

一流大学を首席合格、容姿端麗、天は二物を与えずって絶対に嘘だ。

僕は恋に落ちてしまった。彼女を想うと勉強に身が入らない。

「数学の成績がさがっているみたいね」

わかつてはいるんだけど、心を揺さぶる声と脳を刺激する香りに負けてしまって。

「じゃあ、約束しようか。第一志望が合格したら何かしてあげる」
何かって何？

一日と冬がこんなに長いなんて。

早く冬が終わって、春よ来い。

試験勉強の憂鬱

僕に目標ができた。絶対に第一志望大に合格する。

女性家庭教師のご褒美が欲しくて頑張る、そんな邪な気持ちではなくだ。

時を惜しんでの勉強と集中力で成績は上がっていった。

「偏差値も越えたいし、明日は気晴らしに出かけようか」

休みの日に出掛けるって、どういうことだろうか。

「春が来たら、お別れなものね」

春が来るのが楽しみだったはずなのに、合格したらと考えると何故か苦しい。

素直になれたら、憂鬱にならないはずなのに。

不敵な笑顔

第一志望大の合格発表の日、僕は女性家庭教師と大学まで行った。校門を通り抜けると同級生がいた。

入学当時、僕を馬鹿だと笑っていた奴だ。

心なしか瞼が腫れているように見える。あいつの成績ってどうだったっけ。

番号を確認しようと張り出された紙に目を向けると、僕の番号があった。

勉強の成果が出たんだ。

思わず家庭教師と抱き合って喜んだ。

愕然としている奴と目が合う。僕だってやれば出来るんだ。

不敵な笑顔で応えてやった。

深夜のラジオ

勤務中のタクシーの中で、終電の客を待ちながらラジオを聴く。聴取者の手紙を読みながら思い出の曲を流すという番組だ。

昨日、妻に薦めると微笑み返すだけだった。

帰りが遅いので息子はいつも熟睡だ。

貧乏で大学に行けなかった俺は、せめて息子は大学に行かせてあげたい。

頑張らなければ。

「お父さんありがとう。僕、勉強頑張るよ」

不意にパーソナリティーが告げる息子の名前。

俺の十八番だ。急に家族でカラオケに行きたくなった。

忘年会は無礼講

「今日は無礼講だ。遠慮なしにやろう」

忘年会、社長の音頭とともに乾杯する。

次々と腹の中におさまっていく料理たち。空のビンも並んでいく。

「ちゃんと飲んでいるか。無礼講なんだから飲め」

席の隅で飲んでいる者をつかまえた。

「しかし、車の運転が」

「運転代行を頼むといい。社長が言ってくれたのだから飲もう」

それで忘年会は終了

正月休み後の新年の挨拶で驚いた。

「今年から新社長となる者です」

知らない顔ではなかった。

片道切符

都会に出ることにした。

何年も前から悩んでいたが、情熱は消せなかった。

どんな困難があるのかわからないが、追い求める夢を裏切ること
はできない。

夢を掴まない限り、故郷には戻ってこないだろう。

荷物片手に汽車に乗ろうとすると、声が聞こえた。

別れを言わずに置いてきた恋人だった。

「お生憎さま。私はしつこい女で通っているのよ」

手には小さな荷物。汽笛が乗り込めと響き渡る。

迷惑だよと言う代わりに笑みが零れてしまった。

ポケットのついたハラマキ

職場は室温設定がされているので、防寒対策をしている。膝掛けに厚着と腹巻きだ。更にポケットがあるのでカイロも入れている。

本日も仕事は無事終了。

帰宅後はお風呂に入って体を温める。

そして、夜用の腹巻きにもカイロだ。

ところが次の日に洗濯物を見ると全てが黒くなっていた。

お気に入りの服まで被害に遭ったので泣きたい。

取り出すのを忘れた自分が悪いのに、腹巻きもカイロもやめた。

その途端にお腹を壊した。体は正直者だ。

寒い今宵もジャンクフード

駅前には混んでいるので、駅裏のジャンクフード店に入る。

客足が少ない店なので非常に助かるし、何よりも奥に立つ店員が可愛い。

彼女のゼロ円スマイルが欲しい。

思い切って彼女のいるレジに立つと、違う店員が訝しい行動を取った。

遮るように出てきたのだ。

「彼女に注文したいんだよ」

思わず店員に喧嘩腰で叫ぶ。

「彼女？ 何をおっしゃられているのか」

惚ける店員を無視して彼女を見ると、ゼロ円スマイルを浮かべながらフツと消えた。

寒い今宵もジャンクフード（後書き）

お題『心霊ゾーン』と『今宵もジャンクフード』の合体作でした。

すじろく

新年を迎えて初仕事、昼休み中に社員で集まってすじろくが始まった。

誰が持ってきたのか分からないモノポリー。

順調に資金を増やしているのは、平社員の男性だ。

対抗馬は課長、熾烈な争いが繰り広げられる。

ところが課長が劣勢になるにつれて、場の空気が一変した。

「年明け早々、面白いことが起きそうだねえ」

課長の裏がありそうなセリフに息を呑む。

すると終了の鐘が鳴り、女性社員が盤を片付けた。

彼女が本当の地主だったのね。

自動ドア

私はコンビニのアルバイト店員。
接客業をしていると出会いがある。

「いらっしやいませ」「ありがとうございます」
繰り返しても大切な言葉だ。

ある日、自動ドアが開かずに困っているお客さまを見た。
車椅子の男性で、センサーが反応しないらしい。
すぐに自動ドアを開けた。

「ありがとうございます」
入店した男性の音が店内に響く。

「ありがとうございます」
会計後は私も男性も同じ言葉。

感謝の言葉って人を優しくするんだね。

駆け抜ける社長秘書

社長は自由奔放で秘密主義だ。

いつも秘書である私は振り回されている。

「社長、次のスケジュールは京都です」

「あいている時間はあるか」

社長の悪癖だ。奥さまに知られたらどうするのだろうか。

「会議後の一時間だけあります」

けれど私は社長秘書。会議に向かう社長を見送るしかない。

数時間後、社長は誰かに電話をかけていた。

「逢えない？ 理由は言えないって？ 怖いって何が？」

私は奥さまからも絶対な信頼を得ている秘書である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3634w/>

【二百文字小説】小さな玉手箱

2012年1月6日19時52分発行